

お茶うけ 第49話

北海道のニシン

ニシン(鮭)は寒流性の回遊魚で、北海道地域では3月頃に産卵し、3~4年で成魚になり、寿命は10年ほどです。春ニシンは産卵のために沿岸に回遊してくる4~6年もので、夏ニシンは餌を求めて回遊してくる2~3年ものことです。ここでいうニシンは、北海道サハリン系群のことを指します。(参考:平凡社百科事典)

北海道のニシン漁は、明治の半ば頃までは、それは盛大なものでした。その賑わいは、小樽に日本銀行の支店があり、JRに銭函(げにばこ)の駅があることや、当時の番屋(今のニシン御殿)の大きさなどからも分かります。

そのニシンが1897年(明治30年)に、わが国最高の水揚げ97万トン記録したあと、次第に減少していきました。その後ニシンは、少量ながら回遊してきていましたが、1954年(昭和29年)洞爺丸台風が北海道全域の木をなぎ倒して去った翌年から、それに歩調を合わせるようにニシンも去って未だに戻ってこないのです。

一般に「海洋の変化」、「乱獲」、「稚魚時代の食餌関係」、「天敵」が、ニシンの減少の原因と言われますが、北海道立林業試験場の特別研究員であった三浦正幸は、すでに1941年(昭和16年)に「ニシンの復興のカギは森林にある」と言い、1974年(昭和49年)の論文では、「ニシンも、北の海が生産する膨大な光合成炭水化物に始まる食物連鎖の産物であり、ニシンの不漁は、北海道西、南沿岸に注ぐ河川の流域の森林の消滅、なかでも針葉樹林の消滅が、その下流に当たる春ニシンの産卵場を荒廃させたためである」と発表して、森林を重視するよう提言しました。

話は変わりますが、海にニシンの大群がいたとしても、人々の食用にするだけの需要では量は知れています。では、何故ニシン漁が栄えたか、それ程大量のニシンを必要とする需要は、どこにあったのでしょうか。

『北海道の諸道 街道をゆく15』司馬遼太郎著を読んで、一つの答えが見つかりました。ニシンの最初の大規模需要の用途は、綿栽培の肥料でした。江戸時代に入って綿の国内栽培が始まり、モメン(木綿)衣料が広く普及すると、農家はコメよりも収入がよい綿の栽培に力を入れ、綿の作付が全国に広がりました。しかし、綿の木にたくさんの蝶(綿の花のつぼみ)をつけさせるには、非常に大量の肥料が必要でした。その肥料に、北海道(当時の蝦夷地)のニシンが当てられ、ニシンの膨大な需要が発生したのです。ニシンは取れば必ず売れる産物になりました。

その後、アメリカなどからの輸入綿花に押されて、日本での綿の栽培は次第に減少し、繊維産業は原料綿を輸入・加工して綿製品を輸出する形に移行します。

つぎに綿に代わって、肥料としてのニシンを大量に必要としたのは、北海道の開拓農地でした。明治に入ると、北海道の大規模酪農開発が始まり、多くの人が開拓に参加して、1901年(明治34年)には、人口も100万人に達しました。森を開いて開拓した広い新しい農地には大量の肥料が必要でした。その肥料となったのが、油を絞ったあとのニシンカスでしたが、ニシンを煮て1トンのニシンカスを作るのに90本の丸太を薪(まき)として燃やしたと言います。ニシンの漁獲は年々減ってはいましたが、当時は年に40~50万トンの水揚げがありましたので、このために夥しい木材が森林から伐採され、山はハゲ山に変わりました。

こうして、かつて清流だった川も、雨が降れば濁流となり日照りが続けば渇水します。海は、森からの養分が急速に減少して、植物プランクトンの発生が少なくなりました。その上、ニシンを少しでも多く取ろうとするので、2~3年の若いものまでが一網打尽にされてしまいます。その一方、養殖サケの稚魚の放流が年々盛んになったため、外洋でサケより小型の若いニシンがサケの餌食になっているかも知れないのです。

漁協の悩みは尽きませんが、今は環境に関する関心も高まり、広い範囲で素早く情報を交換できるネットワークも整ってきました。農協、森林組合、漁協など関係者間の情報の共有化によって、一日も早く自然に近い浜辺が戻ってくることを願わずにはおれません。

以上

参考文献:

『木を植えて魚を殖やす』柳沼武彦著
(社)家の光協会刊 1993年8月1日第1刷